

# 蒼空

緊急抗議集会 中国政府は民族虐殺を止めよ  
今日のシルクロードについて  
東トルキスタンの経済と産業構造について  
イリハム・マハムティ家 訪問写真日記

## 日本ウイグル協会抗議声明

ウイグルの真実を世界に訴えていた学者、  
イリハム・トフテイ氏不当逮捕から1か月  
中国政府は直ちにトフテイ氏を

# 釈放 せよ!

ちょうど一か月前の2014年1月15日、ウイグル人知識人イリハム・トフテイ中央民族大学准教授は自宅から中国当局により不当逮捕され、現在にいたるまでトフテイ氏の所在地は不明であるばかりか、中国当局は逮捕の理由すら明らかにしようとしな。トフテイ氏は以前からウイグルの人権問題についてインターネット上で定期的な発信を続けてきており、この暴挙は明らかにウイグルの真実を伝えようとする良心の知識人への言論弾圧に他ならない。

欧米諸国はこの事態に対し中国政府を批判し、トフテイ氏の釈放を求めている。また、国際人権団体であるアムネスティ・インターナショナルの緊急キャンペーンや、現在良心的な中国人を含む世界的に行われているインターネット署名による釈放運動も展開されているが、中国政府は「我々は法律に従って彼を拘束しただけである。他国が人権を口実に内政干渉することは決して許されない」と、未だにトフテイ氏の自由を奪い続けているのだ。

かつて2009年のウルムチ民衆決起の折にもトフテイ氏は一度拘束されたが、世界の釈放を求める声によって自由を得ている。彼のこれまでの言動は新疆ウイグルに於いて正当な人権改善と信仰の自由や民族文化の尊重を求めるものであり、世界人権宣言の精神から見ても、中国の現憲法に照らしても何ら逮捕にあたるものではない。日本ウイグル協会はこの不当逮捕に抗議すると共に、以下の3点を中国政府並びに日本政府に要求する。

- 1、中国政府はイリハム・トフテイ氏を即時釈放せよ
- 2、中国政府は、今後イリハム・トフテイ氏の言論活動の自由を認めよ。トフテイ氏の言論に異議があるならば言論で答えるのが文明国のやり方であり、暴力と弾圧をもって対することは中国政府の国際的信用を失墜させその正当性を失わせるものであることを自覚せよ。
- 3、日本政府並びに国会議員は、この弾圧に対し中国政府に正式に抗議するとともに、トフテイ氏が釈放されない限り中国政府に対し人権外交の立場から経済的交流を制限する可能性があることを明言せよ

2014年2月15日  
日本ウイグル協会

### 中国当局、ウイグル族学者を拘束

#### 言論活動抑え込みか

北京在住のウイグル族学者、イリハム・トフテイ氏が15日、中国の公安当局に拘束された。同氏を知る関係者が16日明らかにした。

拘束の理由は不明だが、同氏は昨年10月の天安門前の車両突入事件後、海外メディアの取材に応じ、新疆ウイグル自治区の現状などをウイグル族の権利を擁護しており、こうした言論活動を抑え込む狙いがあるとみられる。

関係者の話や米ラジオ自由アジアによると、新疆ウイグル自治区と北京の公安当局者が15日午後、北京にあるイリハム氏の自宅から同氏と母親を連行。パソコンや論文などを押収した。

イリハム氏は中央民族大学准教授として経済を研究し、中国語で新疆ウイグル自治区の状況を伝えるウェブサイト「ウイグルオンライン」の開設者としても知られる。

(2014年1月16日共同通信記事)

トフテイ氏参考情報

# 二〇二四年一月二日 日本ウイグル協会 「緊急抗議集会 中国政府は民族虐殺を止めよ」



一月二日、午後一時半から、東京都神田の会議室にて、「緊急抗議集会 中国は民族虐殺を止めよ」が、日本ウイグル協会主催、アジア自由民主連帯協議会、モンゴル自由連盟党共催の形で行われました。参加者は約七〇名、都知事選に話題が集中する中でしたが、熱心に聞き入ってくださいました。



「頑張り日本！ 全国行動委員会」水島総幹事長

かつてナチスが行った民族絶滅政策に他ならず、まさに平和と自由、民族自決権の敵であり「悪の帝国」であると述べました。さらに水島氏は、日本ウイグル協会のこれまでの活動に敬意を表し、特にイリハム氏の運動の中で起きる様々な矛盾や、事態が進まない悔しさの中でも、ウイグル民族の自決と独立、そして人権擁護を訴えて一歩も引かずに闘いつづけたこと、また、彼を見えない所で支え続けた日本人ボランティアの努力を讃えました。

同時に水島氏は、世界が中国の横暴にほとんど沈黙する中、アジアに於いて日本こそが、ことなかれ主義や戦後レジュームを脱却し、中国に対しても、他のいかなる国に対しても堂々と正義を主張するようにならなければならない、それがウイグルをはじめとする諸民族への応援であり、今回の都知事選もまた、日本を変えるための重要な選挙の一つであることを述べて挨拶を終えました。

続いて、Youtubeに挙げられているウイグル民族への過酷な弾圧のありさまを編集し、かつ解説を付けた映像が上映された後、イリハム・マハムティ日本ウイグル協会会長が登壇しました。映像の中には、ウイグルの小さな子供が泣き叫んでいる映像がありました。イリハム氏は声を詰まらせながら、あの子供は多分五歳か六歳くらいだろうが、自分の娘も同じくらいの年ごろであること、あの子供はおそらく誘拐された子供であることは確かだと述べ、今、中国ではウイグル人の小さな子供を誘拐し、そしてスリなどを覚え込ませて犯罪行為をさせる、それによってウイグル人が悪い民族で抹殺すべき存在だと漢人に偏見を持たせ、憎しみを煽るようなひどい犯罪行為を行っていること述べ、そこから、ウイグルで起きている人権弾圧、民族虐殺の実態を語り始めました。



まず、当日配布の世界ウイグル会議政策の資料にあるように、現在ウイグルでは、若者が次々と失踪していること、彼らがどこに行ったのかが全く分からない状態になっていることを述べ、仮にその親族が警察

に訴えても、警察はあるケースでは誘拐犯らしき人間を掴んだにもかかわらず、証拠不十分だと言って捕まえておかない。おそらくさらわれた人の中には、臓器売買などの犠牲者となっている恐れがあると指摘しました。そして、幾つかの映像を写し、ウイグルでは母親が望まない強制墮胎が行われている目をそむけなくなるような生々しい実態を報告しました。

そしてイリハム氏は、現在中国が「テロ事件」として発表しているいくつかの事態について、ウイグル人は武器など何も持たず、それこそ家に料理のための包丁やナイフくらいしか持っていないのに「テロ」など事実上不可能であると指摘した上で、ある事実として、今ウイグルでは宗教行為や民族文化、衣装に対しても激しい弾圧や禁止政策がとられており、ある家に警察が無断で侵入し、その家の主人の妻がまどついている帽子やヴェールをはぎ取ろうとした事件がある、しかも、その警察は、本当に悲しいことだがウイグル人だったと述べました。

そして、その家の主人は、仮にその警察がウイグル人でなければ、自分たちの文化や風習を知らないし意味も分からないのだらうと思ひ、そこまでは怒らなかつたかもしれない。しかし、同じウイグル人からここまで自分の家で無礼なことをされて、家の名誉を守るためにも抵抗し、その抵抗が「テロ」とされて警察に殺され、その家自体も形が残らないほど破壊された、これが中国政府のやっていることで、民族の文化や精神を侮辱し、最後には民族そのものを抹殺する政策がいま日本のお隣の国で大々的に行われている、その事に対し、日本ももつともつと危機感を持ち、このような国はいつか日本に対しても侵略の意志を明らかにす



るだらうと講演を結びました。

続いて休憩後、日本ウイグル地方議員連盟の小島健一県議会議員が紹介され、このウイグル問題には最初期から取り組んできたこと、地方議員としても日本の未来や名誉、そして人権問題は積極的に取り組んでいきたいとあいさつがあつた後、モンゴル自由連盟党代表のオルホノド・ダイチン氏が登壇しました。

ダイチン氏は、モンゴルでも同様に中国政府は露骨な弾圧と、同時に民族差別政策を行っている、大量の漢民族が流入すると共に、文化大革命時からモンゴル人への虐殺が続ぎ、現在も、仮に漢民族がモンゴル人を自動車でひき殺しても、「臭いモンゴル人が死んでもお金を払えば済む」などと言う酷い言葉で片付けられ、牧畜文化は侮辱されていることを語りました。

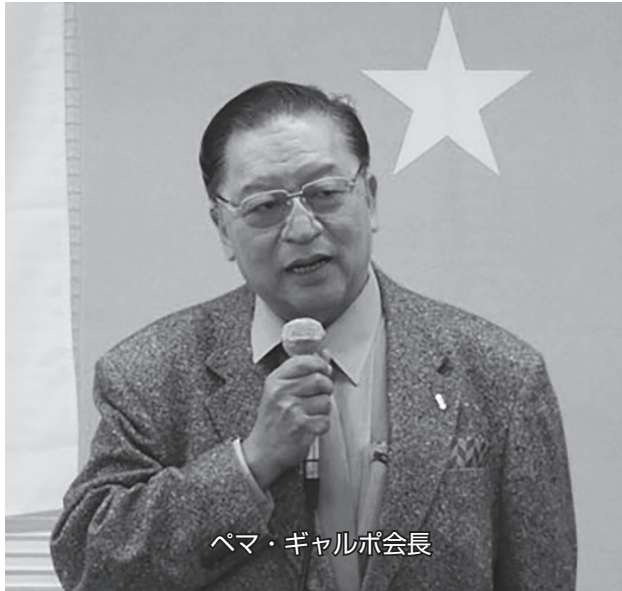
そしてダイチン氏は、静岡大学の楊海英氏の著作『墓碑なき草原』（岩波書店）など、文革時の、そして



モンゴル自由連盟党 オルホノド・ダイチン代表

今も本質的に変わらぬ 中国政府の本質が世界に明らかになっていくこと、自分たちもウイグル同様、中国政府に抗議し民族の自決を目指して運動していきたいと語りました。

最後にアジア自由民主連帯協議会のペマ・ギャルポ会長が登場し、現在残念なことながら、世界は正義よりも一時の経済的利益や安定を求めて中国の暴政に明確な抗議を示していない、しかし、私たちはそのような中国に融和的な態度をとる人たちに対しても、説得と共に、厳しい批判をもしなければならぬ、特にテレビのコメントなどを聞いてみると、中国における民族虐殺の実態などについて全く無知か、もしくは見て見ぬふりをしている人がいるように思う、そして、知っていないながら中国に抗議しない人がいるとしたら、



ペマ・ギャルポ会長

それは明らかに共犯者に他ならないと批判しました。そして、日本では平和を讃え、非暴力での問題解決を主張する方がたくさんいらっしゃるが、もしそうであるとするならば、暴力を否定する以上、言葉の力を使って、暴力以外のすべての手段を使って中国の現在の民族弾圧に抗議しなければ、それはただの偽善に近いものだと述べました。

そして、今日ここにいる以上の、沢山のモンゴル人、チベット人、ウイグル人が、このような集会に参加したいと本当は思っている、しかし、彼らも家族が本国にいたり、日本での生活や仕事など様々な事情で動くことがなかなかできない。その彼らももっと行動しやすい状況を作ること大切なことであり、そのような中で危険を犯し、勇気を揮ってこのような運動を



司会・三浦小太郎

しているイリハム氏やダイチン氏こそ、まさにかつてのアジア独立の志士であり、かつてアウンサン将軍が日本で訓練を受けた本の三〇人の同志と共に立ち上がったのが現在のミャンマー（ビルマ）独立への第一歩だったことを思う時、将来、いま日本で闘っている彼等こそが未来のアジアを作っていくだろうと述べ、講演を結びました。（編集部）

（文責 三浦小太郎）

# 今日のシルクロード

東トルキスタンを切り離してシルクロードを語ることはできません。確かに、東トルキスタンおよびウイグルについて日本にも数多くの資料があります。ですが、それらのほとんどは「バイパス」を通じて日本に入ってきた情報を焼き直したものにすぎません。このような状況では真実どころか、完全に間違った情報が入ってきかねません。例えば、日本のある有名なテレビ番組で「タクラマカン砂漠のタクラマカンという言葉はウイグル語で死の海だそうです」と堂々と放送していましたが、実際はそうではありません。ここで一々挙げることはしませんが、このように誤解されている話は決して少なくありません。

その話は別にして、ここでは主に今のシルクロードの風景およびこの地域に住んでいる民族の生活習慣について少し話したいと思います。

この地域にはウイグルをはじめ、カザフ、回族、キルギス、モンゴル、タタール、ウズベク、タジク、漢など多民族が住んでおり、各々の民族が独自の言語、文字および宗教を持っており、各自の生活スタイルで生活しています。冠婚葬祭などの儀式も宗教によって根本的に違ってはいますが、同じ宗教の中でも細かいしきたりが異なります。例えば、ウイグル、カザフ、キルギス、タタール、ウズベク、タジク、回族などの民族は皆イスラム教徒です。ですが、これらの民族の中でも名前、服装、食べ物などの面で多少の違いが現れます。この地域の民族の多くはイスラム教を信仰して

います。イスラム教では火葬は許されない、豚肉および豚肉関連の材料を含んだ食品を口にしてはいけぬなどの共通の習慣が固く守られています。

この地域は昔からシルクロードで大変有名です。シルクロードと言う呼名の名付け親はドイツの地理学者リヒトホーフエンです。彼は自分の著書「中国」の中で初めてシルクロードと言う表現を使用しました。当時、リヒトホーフエンは西域（中国では敦煌以西の地域、ちなみに東トルキスタンを通るキャラバン隊商路を指していたようですが、後にスウェーデンのヘーデン、イギリスのスタインらは、この東西の交流が西域のオアシス地域に限らず、さらに西のオアシスを出て、海を越えローマに至っていたことに着目し、中国の長安（今の西安）とローマを結ぶ交易ルートの全体をシルクロードと呼ぶようになりました。いずれにしろ、この東トルキスタンがかつて東西交流において主眼な役割を果たしたことに間違いはありません。というのは、東西を結んだあのシルクロードのすべてのルートがこの地域を通過していたのです。当時のシルクロードのルートといえば天山北路（天山脈の北のオアシスを結んだ道）と天山南路（天山脈の南のオアシスを結ぶ道）があり、天山南路がさらに西域北路（天山脈の南側のふもととタクラマカン砂漠の北側のオアシスを通る道）と西域南路（崑崙山脈の南側のふもととタクラマカン砂漠の南側のオアシスを結ぶ道）に分かれていましたが、そのすべてのルートがこの東トルキスタン地域の中にあつたため、東ト

ルキスタンは当時大繁栄していました。当時の文化遺産でこの事実を裏付けることができます。

ですが、大変残念なことに前世紀のはじめごろ探検家を装ったヘーデン、スタインなどらの手によって何十世紀も存続してきた仏教芸術の結晶ともいわれられている文化遺産が略奪、破壊されてしまいました。この許されない残虐行為の傷跡が今もトルファンなどの郊外で生々しく残っています。このような状況で、嬉しいのは1980年代にシルクロードに熱心な興味を持つ多くの日本人が出てきて、東トルキスタンにおけるシルクロード文化遺産の保護と回復活動を行ったことです。東トルキスタンのバイ県にあるキジル千仏洞の記念碑には、様々な面で支援して下さったたくさん日本人の皆様の名前が記されています。このような活動は、いまだに続けられています。

これと同時に、今の東トルキスタンならびにウイグル人の文化遺産、現代文化に対しての破壊行為は21世紀の文明世界においても中国人の手によって続けられています。日々さらに激しくなつて、ウイグル人が生き延びる運命すら脅かされています。民族の文化・歴史・宗教・言語などが消されようとしています。いままで各分野で我々東トルキスタン及びシルクロードのことを支援してくださった日本人の皆様から感謝の気持ちを伝えると同時に、これからも東トルキスタンのことに関心を持って、あらゆる分野で支援くださればと願っています。（編集部）

# 東トルキスタンの経済と産業構造について

## 1. 概況

東トルキスタン（所謂新疆ウイグル自治区）はユーラシア大陸の中心、中国の西北部に位置し、33の国境沿線の県、市が西にカザフスタン、キルギス、タジキスタン、北にロシア、東北に蒙古、西南にパキスタン、アフガニスタン、インドと国境を接し、ウズベキスタン、トルクメニスタンとも近い。面積は16万km<sup>2</sup>で中国総面積の六分の一を占めている。国境線は五六〇〇km達し、中央アジア三カ国だけでも三七〇〇kmという長い国境線を持っている。

人口が2232.78万人（二〇一二年末）で、ウイグル人を中心に52の民族が共存し、少数民族比率は60%である。

地形はアルタイ、コンロン、天山という三つの山脈とジュンガル、タリムという二つの盆地からなり、天山山脈は新疆を二つに、南と北に分けている。その南と北で気象条件は異なり、北の年間降水量は200ミリ以上に對して、南は100ミリ以内と極めて少ない。

面積は広大であるが、山脈と砂漠が大部分を占めている。北と南にはそれぞれ砂漠が広がっている。農業用水は確保できるのは砂漠の辺縁に点在するオアシス地帯だけに限られ、ここが人間の居住を可能とする空間を構成している。オアシスとオアシスの間に長い距離があり、交通インフラの未整備など制約要素はオアシス間の交流を阻害している。またこの地域に共存

する各民族は、歴史的な諸要因、水資源ごとに、居住する地域が異なる。このような問題が重なることで、各地域及びオアシスは自給自足経済を中心として発展してきた。今でも一定の地域、農村では自給自足的な経済が残っている。

経済構造には、資源開発と農業が中心として特徴付けられる。これには自然環境が関連している。広大な面積で、天然資源が豊富であり、いままでも発見された鉱産物の種類は百三十八種、埋蔵量が七億三百万トン、石炭の埋蔵量全国の37.3%を占め、石油、天然ガスの三百億トンで、中国の25%を占めており、同地域は経済がエネルギー需要量の拡大しつつある中国経済にとつて重要な位置を占めている。

この地域は中国の西部大開発政策の中で、農業が経済構造の中心として、鉱物資源の開発を目的としている。

## 2. 産業構造

新疆ウイグル自治区政府は、産業発展戦略について、80年代の半ばまで農業と畜産業、石油、石油加工業、紡績工業、塩化工業、食品産業など、広い分野の発展とこの発展を地域全体の経済発展に結びつけるために、農業では各農産物のバランスを保持ながらの成長、工業では軽工業と重工業の合理化を重点に、全面的な発展戦略を展開してきた。一九八五年に中央政府

のマクロ経済発展戦略が公表され、そのなかで西部地区ではエネルギーと農業の開発が提示された。新疆政府も、「豊富な自然資源に対する大規模開発を通じて、自然資源の優位性を経済的、商品的優位性に転換させ、新疆経済の迅速な発展を実現させる」という発展戦略を打ち出した。地域の発展戦略は、「全面型」から「一黒一白」すなわち石油と綿花を中心とする発展戦略へ変更した。90年代末に出された「西部大開発」戦略の中で、新疆政府は「一黒一白」を重点する産業戦略を一層強化して「全国大規模優良綿花生産基地」に指定された。さらに、「西部大開発」の重大なプロジェクトである「西気東輸」によって、中国天然ガス基地にもなりつつある。このような産業発展政策のなかで、新疆における産業構造のアンバランスが起こつて、以前から自然条件、社会条件などが異なる地域の間での格差が拡大しつつある。

新疆の産業構造を中国全土及び沿海地域と比較してみると、新疆における産業構造の特徴及び格差を明らかにすることができる。

第三次産業に関しては、新疆と沿海地域との間にあまり大きな相違はないように見える。顕著な相違は第一次産業と第二次産業にみられる。新疆の第一次産業の依存度は沿海地域及び全国平均と比べると、大きな相違がある。新疆の農業諸環境は十分に整備されておらず、その生産性はかなり低い。もちろん都市近郊型農業で収入率の高い沿海地域と、気候や自然条件から

農産物の販売路に至るまで難題を抱える新疆を、単純に比較することはできないが、第一次産業に依存しなればならない新疆にとって、生産性の低さは、市場経済を生き抜く上でも大きな課題と言えよう。

工業全体を重工業と軽工業に分けて見ると、軽工業の工業総生産額に占める割合は改革开放が始まった一九七八年に41.6%で、その後はこの比率は徐々に上昇したが、一九九五年後急速に低下し始め、二〇〇三年には、23.5%まで落ちた。軽工業の内訳については、農産物を原料とする軽工業の割合は一貫して85%である。重工業の中で、鋳業、原料工業の占める割合は圧倒的であり、年々増加傾向である。これに対して加工工業の割合は年々減少する傾向である。

新疆は中国の地下資源の開発を重点とする地域であり、国有企業は絶対的な地位にあり、しかも重工業を基盤としている。中国では地下資源のすべてが国家管理下にあり、地下資源の開発と関連産業は当然国有企業によって行われる。そのため、新疆では、国有企業のウエイトが極めて高い工業体制が形成されている。そのことにより、軽工業、あるいは軽工業の担い手である非国有企業の活動はあまり重視されていないと思われる。

また、計画経済システムの下では、新疆は資源、エネルギーを生産し、それが沿海部に運ばれて加工され、新疆は沿海部から完成品を購入するという分業体制が形成されていた。歴史的に形成されたこのような産業構造は、資源、エネルギー価格が相対的に安く、加工品が相対的に高いという価格の歪みを通じて、新疆から沿海への経済余剰移転を促進しておりこれは、いまでも続いている。

一方、産業構造の地域比較から特徴を探ると、ウ

ルムチ、シハンズ、ハミ、キズリス地区では三次産業の割合が高く、第二次産業の割合が高いのはカリマイ、トルファン、バインゴロンであり、その他の地区は第一次産業、特に新疆の南部地域のホータン、カシエガル地区では、第一次産業の割合が高い。地区の特徴を大雑把に区分すると、新疆の地域を第二次産業が相対的に発展した地区と第一次産業割合が高い農村地区と分けることができる。石油、ガスの中心的に採掘地域であるカラマイ、トルファン、バインゴロンで第二次産業の割合が高いのは、地下資源を開発によって工



PHOTO: Gusjer (Flickr.com)

業化が進んでいることであろう。

新疆は拡大面積にオアシス地域が点在しており、居住可能な地域が十分に形成していない。オアシスには、相対長い距離があり、交通、電気などインフラの整備が進んでおらず、商品経済と近代化工業に取り残されており、域内統一市場が形成されていない。新疆の経済は商品経済と自然経済、近代工業と伝統農業が併在する二極化経済であると言える。この二極化を促したのは、政府の工業建設の中心がウルムチ、サンジ、シハンズ、カラマイ、所謂「天山北翼地域」に置かれていたことである。この地域は新疆総人口の23%を占めているが、自治区国内総生産の50%、工業総生産の70%を占めている。しかし南部地域に位置するホータン、カシュガル、キズリス地区は総人口の30%を占めているが、新疆総生産の僅か9%を占めるに過ぎない。そして、農村人口が総人口に占める割合は70%以上を占めている。このような格差の拡大は、各地域の自然環境、産業構造にもよるが、政策と投資対象が主として鋼鉄、石油開発、石油化学など農業と直接関連がない産業に置かれていることが大きい。

また、新疆地域内経済格差の拡大は、政府の地域開発戦略とも深く関係がある。一九八五年から改革政策と地域開発戦略は、農村から都市へ、農業から工業へと移転した。この転換は先に工業化した地域はより速く成長させるといふ、地域間不均衡発展の理論を容認することになった。一九八五年末に中央政府により出されたマクロ経済の発展戦略に基づき、新疆政府は、新疆の経済発展戦略を全面的発展戦略から石油、綿花重視型発展戦略に転換した。一九九〇年代に入ってから市場経済の本格的導入、ユーラシア鉄道の開通に伴

い、ウルムチを中心に、鉄道線沿い地帯、天山北翼経済地帯が大きく発展が遂げて、都市化が進んだ。これに対して南部地域の経済が遅れることになった。南部地域は綿花を中心とする農業経済であるが、綿花生産は計画的に行われ、その流通も規制され、集荷価格が低いため、農民収入を大きく増加させることはなかったのである。

### 3. 農業経営の形態と特徴

耕種業、林業、牧畜業、漁業を包括した農業生産は、新疆経済の中で重要な位置を占めている。新疆の農業がオアシス農業であり、同地域の自然環境に適した形で自然の微妙なバランスの上で成り立ち、オアシス農業特有の困難を乗り越えながら発展してきた。新疆農業の代表的なものは食糧、綿花、甜菜、油料作物、加工用トマト、果物である。

新疆の耕地面積は430万ヘクタールで、全土地面積の3%に過ぎない。農業人口1人当たり耕地0.3ヘクタールである。従来により、新疆ウイグル・シルクロードの人々を養ってきた重要な生産地は山の中腹を利用する遊牧地域・草原と平地の農地である。遊牧地域は羊を中心に牛、山羊、馬などの放牧経営によって、畜産物の生産・供給をしている。農業地域の中の主軸的な生産経営が伝統的な耕種業を基軸にした畑作・果樹、さらに酪農・野菜などが組み合わせられた複合経営である。最近、野菜（花卉）など施設農業も主要な大都市周辺に展開されている。

新疆の農業構造を見ると、二〇〇五年では、農業

各部門の第一次産業に占める比率は、耕種業は72.2%、牧畜業は21.3%、漁業は0.5%、林業は1.9%である。中国全土平均と比べると、耕種業割合は22.5ポイントも高い。これに対して牧畜業の割合は12.4ポイント低い。これは新疆農業の耕種業への依存度が高いことを説明できる一方で、資源の面から見ると、優位性を持つ牧畜業、果物の発展及び農産物の品種及び品質調整が十分で、伝統的産品も多く、ブランド製品などは少ないという特徴を有する。

新疆の面積は広いが、砂漠地帯、山地、荒野等不毛地帯が多く、農業用水が確保できるのは砂漠地帯に点在する一部のオアシス地帯だけに限られる。それゆえ典型的なオアシス農業に属する。また、農業構造の地域比較から特徴を探ると、地理位置、気候、自然環境が異なる各地区間にも、その地域による特殊な農業生産・経営形態が形成され、農業構造でも大きな違いがある。

新疆の地域性を見ると、まず、新疆農業総生産額に占める割合は、サンジ自治州11.2%、阿克苏地区10.3%、カシュガル地区12.6%で、この三地区だけで30%以上を占めている。また構成比で耕種農業部門の比重が大きいのは、北疆のボルタラ自治州65.2%、東疆のトルファン地区74%、キズリス自治州を除く南疆の各地区である。牧畜業では、北疆の各地区で高くなっている。新疆の農業構造の特徴として東疆と南疆では耕種業が中心になっている。

### 4. 農業生産・経営形態の課題

新疆における農業生産・経営について、前にも述

べたように、自然環境及び社会環境等諸要因により、農家の農業生産・経営活動は耕種・牧畜・青果物の複合経営であり、全ての農産物は農家の自給自足であった。例えば、「計画経済」時期においても、都市住民の農業副食品はほとんど国有農場、国有園芸場、国有牧場により供給されたが、農家に関しては、「自留地」を活用して自分の副食需要を満たしてきた。これはいまも続けている。農家からみると、日常生活に欠かせない食糧作物の栽培は、経営上安全性が高いので、食糧生産を中心に農業経営を展開するのである。青果物については、ほとんど自家で生産・消費されているから、市場での取引が少ないことで、その一部だけは生産者の直売形で、農村部で定期的な開催されているバザール（市場）或は路上で販売されてきた。家畜は農家の現金収入源であった。さらに、家畜の糞尿の堆肥によって、化学肥料への支出を節約できる。作物の副産物により家畜の粗飼料を得て、飼料代を節約できる。このような複合生産・経営形態は食糧の安全・安心・環境安全、また持続的な循環型農業から考えると望ましい農業経営形態といえるが、経済学の分野から見ると、経済的効率が低いので、農業の現代化を抑制し、農業のグローバル化が急に進んでいる今では、産業は競争力を失って、地域全体の経済発展に影響を与えたと考えられる。

新疆におけるこのような農業生産・経営のあり方は、その地域の自然環境、生活様式、民族習慣など諸要因により、従来から形成され継続してきたことであり、これからも大きな変わりがないといえる。しかし、生産・経営のこのようなあり方を現代農業の発展とある形で結びつけていけば、その複合生産・経営の元で



環境型、安全、持続的農業の発展を期待できる。この際、必ず生産指導や統一的な販売等日本の農協のような農民組織が現代農業へとつながる道が鍵になる。

計画経済の元で、農家の農業生産・経営権がないので、農民が政府の雇用者として生産だけを行って、全ての農産物は政府関係者により経営・流通されてきた。一九八五年から一九九二年の間、中国全土において、農産物の生産・流通は「統一買付・統一販売」から「国家の契約買付+市場経済」という「双軌制」へと移行し、農産物の市場流通は大きく発展した。しかし、新疆では、食糧と綿花の生産量を保障するという地方農業政策の下で、他の経済作物、青果物などの発展が規制され、その生産も分散型また規模が小さいので、地元内の流通に限られ、地産地消の形で流通されてきた。一九九五年から農民の食糧問題も解決できるようになった一方で、都市住民の所得が高つて、農家と都市住民の生活需要と消費ニーズも変わつて、新疆の農産物生産・流通は中国全土とともに全面的な市場体制へと移行し、それから農家の生産・経営形でもある程度変化が起きた。いままでは、農家の農業生産・経営には自家消費意識から市場向けの商品意識に変化し、青果物、畜産品を中心とする副食品の生産、消費が急速に拡大してきた。その一方新疆における農産物の流通システムがまだ整備されていないため、農家と消費者との直接取引（小売自由市場）の形で、全体的な経済効率が低い、また生産には組織性がなく、生産意欲があつても、市場情報の収集が困難であつて、生産供給の安定、産業の持続的発展に影響を与えた。また、農家の伝統的な生産形式で生産供給されている農産物は商品性が低いので、都市住民の消費ニーズに合

わないことに、農産物加工業の発展を求めた。産業の展開についても、農家と市場、農家と企業を結びつける仲介組織、つまり農家生産・経営の組織化を求められた。

## 5. 農業政策の課題

新疆の農業政策は、中央政府が一九八五年に公表したマクロ経済発展戦略に基づき、食糧生産を一定程度確保すると同時に、綿花重視型農業発展戦略を続けてきた。このような政策は新疆の自然条件に適應する他の経済作物、牧畜産業の発展を抑制したのである。確かに、綿花産業の発展は、今では新疆の重要な産業になっており、農家収入の増加にも一定の役割を果たしていることに間違いがない。しかし、当期待された綿花の輸出により大量な外貨を得ることや、紡績とアパレル産業が振興され、新疆の中堅産業の一つとなり、毎年巨額の税収入を稼ぎだすと同時に、大きな雇用効果をもたらすということとはあまり実現できなかった。新疆の綿花生産の単位面積当たりの生産性は世界最高になっているが、生産コストと運送コストが高いので、価格は国際市場価格より高く、価格比較において国際市場での競争力が弱い立場にある。紡績企業については、企業数が少なく、規模が小さく、投資など問題で設備更新と技術が遅れている、また、80%が国有企业で、従来の体制で運営しているため、国内業界間での競争力が低いのである。

新疆紡績業生産総額僅か全国の0.5%を占め、しかも全国紡績業の純利益二七九億元に対して四億元の赤字になっている。生産されているものも棉布、綿糸など

粗商品である。アパレル産業はほとんど発展していない。郷鎮企業（農村企業）にしても短絨、棉実油などの加工に限られている。作付面積の作物総面積に占める割合は30%左右で、増加傾向であることに間違いはない。ここで取り上げたいのは、綿花生産は、自然気候条件により、ほとんど新疆地域に配置されている。この地域は新疆でも一番貧乏な地域で、農家一人当たりの耕地面積僅か0.15ヘクタールで、綿花作付面積の拡大は、他の経済作物の生産拡大に抑制し、生産の単一性が農家収入増加に役立っていないと考えられる。

つまり、新疆は中国有数の綿花生産基地であるが、新疆内での綿花加工量は、新疆で生産された綿花総量の1%にも満たない。綿花生産について、その量的増だけが強調され、その生産性の向上や関連産業の育成が軽視されてきた。量的増産は耕地の開拓、化学肥料の投入などでむしろ農家の負担を増加させ、農家所得の増加にマイナスの影響を与えている。（編集部）



PHOTO: kpi (Flickr.com)



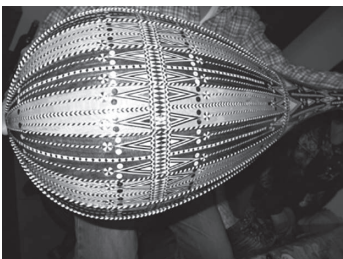
アムステルダムから  
訪日したばかりの  
アイグル・アッサムさんと  
笑顔で食卓を囲む



食事のあと(最中?)  
イリハムさんが持ち出したの  
はウイグルの民族楽器  
ドゥッタールというそうな……



弦は2本、これは指で弾くが、  
ピックで弾く楽器もあるという



後ろ側はこんなに肌理細かな  
細工になっている

平成 26 (2014) 年 3 月 21 日



イリハムさんが  
弾く形を見せてくれる…  
(あくまで形です)



ほんとに演奏してくれたのは  
12 ムカムの名奏者にして  
歌手のアイアッサムさん



披露してくれたのは  
クチャ・ハラクという民謡



哀愁を帯びたメロディは心に  
響く 日本で公演したい  
という希望が……

## これは名演奏

## 日記制作

映像教育研究会・稲川和男



12 ムカムという  
ウイグル音楽の演奏チームは  
演奏が最低 7 人  
踊り手が 6~8 人  
歌手手が 3~4 人  
20 人くらい必要と云う



同席していたアリフさん  
(建材会社に勤務)も  
ドゥッタールを弾く(形)を  
を見せてくれた…

楽器は、この他に  
サッタール  
リジェキ  
テンブル  
ダップ などという  
さまざまな弦楽器・打楽器が  
あるという

フルメンバーで この  
12 ムカム を聞かせて  
頂きたいものである

# イリハム・マハムティ家 訪問写真日記

# 日本ウイグル協会学習会報告

## —ウイグル音楽を学ぶタベ—

三月二十八日東京江東区の亀戸文化センター会議室にて、ウイグル人音楽家、アイグルさんを講師に、ウイグル音楽を学ぶタベと題した学習会が開催されました。アイグルさんが日本を訪問した機会に急遽行われたイベントの為、殆ど告知もできず会員の皆様にも申し訳ございませんでしたが、約二十人の方々がご参加くださいました。

アイグルさんは現在オランダ在住で、欧州各地で音楽活動をしています。歌手としてロシアにも留学経験があり、モーツアルトのオペラなどでも素晴らしい声を聞かせてくださいますし、また、キリスト教教会でも歌われて民族や宗教の垣根を越えてウイグルの文化の理解と普及に努めてきました。日本で開催された世界ウイグル会議の折も東京で公演を行いました。この日は主として、ウイグルの世界に誇る文化遺産である12ムカムについて、協会のウイグル人会員アリッパ氏の通訳でお話をいただきました。

12ムカムとは十六世紀に完成されたとされるウイグルの伝統音楽の集大成で、総てを演奏すれば三日間かかるという言われる、まさに民族の大叙事詩です。それ以前からウイグル農村や遊牧民の間で様々な形で伝承されてきた、民謡、恋愛抒情詩、教訓、歴史説話、そしてウイグル人の人生訓や伝統精神などがほとんど

網羅された、歌、踊り、音楽演奏の総合系術と言つてよいでしょう。アイグルさんは誇りをもって、しかも少しも押しつけがましさを感ぜさせることなく、この音楽は漢人の音楽とも、また西欧のクラシック音楽とも全く違うリズムとメロディーを持つウイグル独自の芸術であることを語り、しかも文字で書きつけた記録ではなく、民族の中で親から子へ、子から孫へと伝えられてきた、ウイグル人は本当に歌と踊りの好きな民族で、集まればすぐありあわせの楽器で演奏し、歌い、踊る平和な人々と語りました。又、アリッパ氏は、この12ムカムの詩は古典の文章で、現在のウイグル人ではよく理解できない部分すらある、それほど長い歴史の中で作られてきたものだと言及しました。

専門的な音楽解説ももちろん語られましたが、参加者の方々が何よりも感動したのは、アイグルさんがその会場で披露された数曲のウイグルの歌で、12ムカムからも引用した歌が、まさしくシルクロードの風を感じさせるような雄大で荒野に響き渡るように歌われたことでした。アイグルさんは歌ったのちに思わず涙ぐみ、このような歌を日本人の人に聴いていただけのもうれしいが、本当な故郷の地でこの伝承音楽をもう一度演奏し歌いたいと言りました。(編集部)



# ウイグル難民の子どもたちにもたたちに救援を イリハム・マハムテイ東南アジア報告

このたび、タイに於いてウイグル難民二〇〇名(約半分近くが年少少女)がタイの農村で警察に保護されたという報道がなされています。当会会長のイリハム・マハムテイは、東南アジアを三月末から約一週間訪問、タイのみならずウイグル難民の置かれている実態を次のように報告しました。

「まず、これまでもウイグル難民が東南アジアから第三国に向かおうとしてきた事例はいくつもありましたが、しばしば中国に強制送還されてきました。今回タイにて保護された二〇〇人の難民はトルコ行きを望んでおり、タイ政府とトルコ当局との間で話し合いがなされているはずですが、タイ政府当局はこれまでもベトナム難民、北朝鮮民の保護などを行ってきており、同様の人道的な政策がとられることを期待しますが、むしろもっと深刻な事態が東南アジアの他の地域で生じています。」

「今、約六〇〇〇人のウイグル難民が東南アジアには隠れ住んでおり、しかも多くは家族連れで、子供達や妊婦も少なくありません。問題は、彼らがウイグル語しかしゃべれないので、仮に警察に不法入国として逮捕された場合、コミュニケーションもできず、不当な扱いを受けても抗議することもできません。子供たちの中には、不衛生な環境で病死した子供もいることが分かります。また、妊婦が留置場で、病院に行くこともできずお産をしたという例もあります。彼らはトルコ大使館に保護を求めるしかありませんが、大使館も十分な保護ができる体制にはなく、難民は今の所善意のウイグル人家庭に匿われている状態か、全く行くところ

もなく苦しんでいるのが実態です。」

「私が訪問したある家庭では、子供三十一人、大人十五人が匿われていました。子供たちは皮膚病にかかっている子や伝染病の恐れもあり、この子供達にせめて医師の治療だけでも受けさせたいのですが、勿論一般の病院に行けばそのまま逮捕されてしまいます。」

「ウイグル難民支援、そして希望する第三国への安全な出国の為に、現地のような方々との連携も今回の東南アジア訪問で計画してきました。今の段階ではまだ明らかにできないことが多いのですが、私はまず、ウイグル難民の子供たちを救うための緊急支援基金を作ろうと考えています。勿論民族の使命として、まず世界のウイグル人たちが支援を始めなければなりません。日本の皆様へもぜひウイグル難民救援へのご支援をよろしく願います。日本政府も、安易で将来の危険を招きかねない移民の受け入れよりも、まず人道・人権の立場からのウイグル難民への救援と保護を考慮してくださるよう、心より願っています。」(イリハム・マハムテイ 二〇一四年四月一日)

皮膚病にかかっても病院に行くこともできない  
ウイグル難民の子どもたち。



会員の皆様へ、機関誌原稿募集のお願いです

ウイグルについての思い、意見、感想など、自由にお寄せ下さい。

ウイグル協会機関誌最新号をお届けいたします。すっかり春めいた天気となりましたがウイグルをめぐる情勢は厳しさを増しているのが現状です。

機関誌次号は七月半ば発行予定(年四回)ですが、皆様方のウイグルへの思い、意見、協会への御提言などございましたら、六月二十五日までに、協会宛にメール、郵送等でお寄せ下さい。

会員の皆様の交流の場として、この会報をぜひ開かれたものにしていきたいと思っております。

これからもよろしく願います。

編集部



特定非営利活動法人  
日本ウイグル協会  
Japan Uyghur Association

日本ウイグル協会

公式サイト  
<http://uyghur-j.org/>  
メールアドレス  
[info@uyghur-j.org](mailto:info@uyghur-j.org)